

なぜ殺してはならないのか？—法が禁ずるから

ㄥㄥ 真理は隠れている。探し出すのはあなた自身だ。 小野しまと

☆ ☆ ☆

なぜ殺してはならないのかという問いに対して、正しい答は一つしかない。法が禁ずるから、という答である。

これほど単純明快で、正鵠を射た答はないのにもかかわらず、多くの人はこの答を聞くとすぐに不満の意を表す。

人間は本来、人を殺すようには生まれついていない。人間の本性は他者を愛するように出来ていて、人類愛、同胞愛、家族愛はごく自然的なものだ。法が禁じなくても、普通の人間ならば、そんなことは当然判っているはずだ、などと主張する。

あるいはまた、死や痛みを恐れるのは人間の本能であって、自分が殺されることを思えば、人を殺すことなどどうてい出来ないだろうなどと言う人もいる。

自分の痛みや苦しみを人には与えまいとするのが、人間の本来の感じ方であって、良心とか同情心といったものを抜きにして、法だけで人間の行為を考えることはできない、などと言う。

いずれも、人間というものの本質が見えていない、甘っちょろい考え方だと言うほかはないのである。こんな安っぽい理想主義では、殺しの意味などどうてい判らないだろうし、いま人類が直面している様々な困難を乗り越えることなど出来るはずがない。

人類の歴史が始まって以来、その進歩や発展の流れとともに、一方で延々と続いてきたのは「殺し」の歴史ではないか。どんな時代でも、どんな地域でも、人間は互いに殺し合ってきたし、それは今もなお続いている。

盗みや怨恨による個人レベルでの殺人から、グループどうしの闘争や虐殺に至るまで、今でも新聞やテレビのどこかでこのような事件の報道されない日は無いと言ってよいのだ。

それも最近では、殺す相手が誰でもよいという、いわゆる無差別殺人が急増しており、愛の対象としての人間の意味がだんだん希薄になりつつある。人間がほとんど物体に近い無機的なものとしてしか感じられないという、新しい時代に入ったとさえ言えるのである。

このような歴史的事実を見ただけでも、殺しを行うのは、人間の本性の一つだと言っても決して過言ではないであろう。これほど自明なことではないのである。

そんな人間が、自分の痛みや苦しみを知っているからといって、他者への殺意を抑えたり引っ込めたりするであろうか。苦しむのは他者であって、自分ではないのだから。

むしろ、考えられるかぎり最大の苦痛を他者に与えてやろうとする人間は、我々が想像する以上に沢山いるのである。

ユダヤ人迫害の記録を見ると、暴徒化した群衆の間で支配的になるのは、簡単には死なせないぞ、死ぬ前にたっぷり苦しめてやるぞという、「なぶり殺し」の心理だと言われている。

人間を性善説や性悪説で説明しようとする紋切り型の思考や似非哲学が今もって多いのには驚かされるのだが、人間は本来善でもなければ悪でもない、と言うべきなのである。

人間の本来の状態は、むしろ「白紙」だと言わなければならない。何らかの行動を取らないかぎり、善も悪も生じないからである。何か一つの行動を自由に選ぶことによって初めて、その行動の意味が問われることになる。

人間は黙ってじっとしているかぎり、善人でもなければ悪人でもないであろう。それは、どちらかの行動を自由に選べるという無差別な状態にすぎないのである。

しかし、どんな行動を取れば善で、どんな行動を取れば悪なのであろう。実は、それさえ確実に判断できないというのが人間の置かれた状態なのである。それでも、生きているかぎりには行動しなければならず、その場その場の直感で何かを選んでいくしかない。

そのような、何かを選ぶしかないという自由を、ユダヤ・キリスト教は「原罪」と呼んだのである。何かを選ばねばならない、しかし、何を選んだらよいのか分からない。そんな状態が自由なのだとしたら、サルトルの言うように、人間はまさに自由の罰を負っていると言ってもよいであろう。

人を殺すことは善であろうか悪であろうか。それさえ分別できないというのが、人間の置かれた原初的な状態なのである。

未開社会では、何の罪悪感もなしに人間を殺すことは常道であった。時には食料補給の手段として肯定的に意味づけられることさえあったのである。

家族や仲間どうしの殺しは禁じられたであろうが、それは罪悪感によるというよりは、共同体の利益を守るためのタブーであったと考えられる。こうして、共同体の利益を「善」とする道德観が作られていったのであろう。

しかし、これは、他の動物はいくら殺しても仲間どうしでの共食いはしないという動物の習性と同じようなもので、殺しそのものを悪と見なす意識ではない。

殺しも場合によっては「善」と見なされたであろう。それは、今日でも、共同体の利益や正義のためには殺しも許されるという発想として残っている。

戦争の正義のために敵国人を殺すのは「善」であり、共同体を守るために犯罪者を処刑するのは「善」である、等々といった思想である。

このような正義や法によって定められた「殺し」を「必要悪」だと言って弁明する向きもあるが、それが悪ではありながら必要だという理由で、やはり或る種の「善」と認められていることには変わりがない。

しかし、「殺し」を絶対的な「悪」と定め、無条件に禁じている法がある。それは、旧約聖書の「出

エジプト記」の中で、神がシナイ山上でユダヤ民族に伝えたと言われている十戒のひとつ、「汝殺すなかれ」という言葉である。

聖書では十戒の告知に続いて、それらが守られなかった場合の罰則が述べられている。そこでは、「殺し」に対しては「殺し」が、「目」に対しては「目」という報復行為が許されているが、「汝殺すなかれ」という言葉自体は、神の絶対命令として、無条件に人間に課せられたものと言える。

この言葉を人間が法として定めたのは、神への信仰によって受け入れたにせよ、あるいは自力で作り出したにせよ、それを善なる行為として選んだ自由な意志の結果である。

「殺し」は、人間にとって最大の自由であるとすでに述べた。この最大の自由を野放図に解き放つ方向ではなく、「殺し」を絶対的な悪と考え、それを禁止する方向に自由を見いだしたということは、人間にとっては最善の選択であり、最高の知恵だったと言えよう。

人間は、「造る」自由によって「壊す」自由を抑えたのである。以後「殺すなかれ」という法は、人類が守るべき絶対的な戒律となり、まるでそれが人間の本性でもあるかのような幻想をさえ与え始めたのである。

しかし、その幻想が崩れ始めたことを教えるのが、最近わが国を始め世界の各地で頻発している、今までの常識では考えられないような異常な殺人事件の数々ではないだろうか。

「なぜ殺してはならないのか。法が禁止するからである」と、西村浩太郎著『カインの印―殺しの哲学―』（ビワコ・エディション版）の最終章には書かれている。

これを読んだ人が、「そんな答では子供や若者たちは納得しないですよ」と言ったそうだが、この人には、人間にとって「法」がどんな意味を持つものなのか、よく判っていないのである。

法は、人間の精神が到達できる最高の自由の表現であり、知恵の表現であることを忘れてはならないであろう。

秋葉原無差別殺人事件をきっかけにして、人間の本質や自由の問題、法や文化の問題を根本から考え直し、真に人間のものと言える「哲学」を確立することこそ、このような殺伐な社会を克服し、わが国のみならず、人類全体にとって幸福な未来を造り出すための緊急な課題と言えるのではないだろうか。

[2008/07/13 magmag]